<論説>

日本臨床皮膚外科学会 (JSDS) の発展を願って

小 林 敏 男
浜松ヒフ外科クリニック

1989年5月15日金沢市にて，世話人・畷稀吉先生の御尽力で第1回 JSDS 総会および学術大学が開かれて以来，3年目にして念願の〈Skin Surgery〉初版が出版されたことは誠に喜ばしいかぎりです．この初版にあたり，過去6回迄の学術集会の経過を振り返りながら，今後の JSDS について私見を述べさせていただきます．

JSDS NEWS No. 1 に記載されているように，当時の発会の動機は，＜日常外来で比較的よく見られる皮膚疾患を外科的に治療している医師達で勉強しあう会を作ろう＞ というものでした．尚，当時は ISDS（国際皮膚外科学会）の会員会とする意図も多少ありましたので，国際皮膚外科学会・会員会という名称を用いましたが，実際には ISDS と JSDS とは各々独立した会でもあり，1990年より，日本臨床皮膚外科学会と改名されました．

現在私から見て，この会の特殊性は，以下の点であろうと考えます．

日本臨床皮膚外科学会 (JSDS) は，皮膚科・形成外科などで研究される領域のうち，一部（皮膚外科・皮膚表面外科の疾患）をより深く掘り下げる目的の会です．形成美容外科（専門）医が行っている広い範囲の手術を習得する会ではないことを機関誌発行にあたりクリアにしておくことは，無用な混乱を未然に防ぐため大切なことと考えます．例えば，老化について考えてみますと，Face Lift や，上下眼瞼しわとり術などの複雑な手術手技は形成外科医・美容外科医の領域であるのに対して，JSDS では，外科用薬療法を含め，もっと簡単なしわとり方法，手術が研究されるべきでしょう．

この目的に賛同する方ならば，皮膚科でも形成外科でも，科を問わず入会が出来ますし，さらには，医学の発展には自然科会の他の分野の協力なしでは不可能なこと故，物理・化学・薬学・等の研究者の参加も歓迎している会です．

また，常に＜本音を語り，何でも聞ける会＞ を目指すためには，

① 組織上，運営上，無用な権威を作らぬこと．

② 会員を一部の科に限らせないこと（言い換えれば，将来を見通し，ボーダーレス化のメリットを吸収しながら，同時に自己のさらなる専門化を図る）．

③ 30代～40代のアクティブに活動する方達を中心に運営すること．

上記の3点などを考慮しつつ民主的に会が運営されれば，疾患（患者）を中心とした研究会が発展すると私は考えます．

なお，他の学会（組織）との関係をクリアにさせますと，

1. 日本臨床皮膚外科学会（JSDS）は，国際皮膚外科学会（ISDS）とは全く独立した組織です．私は昨年までの4年間，ISDS の理事でしたが，ISDS は各国に支部組織を作る考えは全くありません．

2. また，JSDS は，アメリカ皮膚外科学会（ASDS）とは，その構成会員が異なっています．即ち，ASDS はアメリカの皮膚科医だけのための皮膚外科学会です．このため，惨めにもアメリカ形成外科学会など他の科の組織と対立関係になってしまったようです．このような失敗の轍を踏まぬことが，JSDS には極めて大切なことと思われます．JSDS は，あくまでも＜疾患＞中心に治療に関心ある方々が広く参加できる会を目指しています．このためにも，JSDS は前もって1，2年前から各学術大会の研究テーマを決めています．なお，第3回 JSDS 学術大会で招待講演されたニューヨーク大学皮膚科・A Bernard Ackerman 教授からも，この JSDS の考え方．方向性に対して賛意をいただけました．

その他この JSDS の特徴としては，（現在種々の科において学会および分科会が極めて多く，通常の会にしては疲れが蓄積されてしまうという会員の方の声も多いので）可能なかぎり勉強会とリラックス（スポーツやアミューズメント）を兼ね備えた会にしている点でしょう．学会終了後，帰宅しても精神的な疲れが残らない会なら素晴らしいではありませんか．今後とも会員の皆様には，この会を長く存続させるためにもこの点をご配慮していただき，そのための良いアイデアを出され，ご参加されることを願う次第です．